特色ある取り組み ココに発見!!

全国に発信 高校のチカラ

埼玉県

シリーズ・18

筑波大学附属坂戸高等学校

筑波大学附属坂戸高等学校（埼玉県坂戸市）は、全国で初めて「総合学科」を取り入れた国立の高校だ。文部科学省「SGH指定校」や「国際バカロレア認定校」など、生徒の多様性を象徴するさまざまな取り組みがなされている。8月28～30日の三日間にわたる「リーダーシップ研修プログラム」のリポートと共に、進路指導部主幹・藤原亮治教諭にお話をうかがった。

自己を知り、描いた未来を確実に実現

持続可能なアセアン社会を創る人材育成

グローバル化やIT化によって、複雑化する社会において、「21世紀型」スキルの修得は喫緊の課題だ。筑波大学附属坂戸高等学校では、総合学科という特色を活かし、横断的な学習でグローバル社会に挑戦するさまざまな先進的な学びの機会を設けている。時代のニーズに応えたカリキュラムに、アクティブ・ラーニングを通して取り組み、基礎知識と共に、「思考力」や「実践力」を総合的に身につける。

「総合学科は科目数が多い分、個々の学びが孤立化しないカリキュラムマネジメントが重要になります。本校の生徒は、自分で時間割を組むため、得られる知識やスキルが異なります。これまではそれらを共有したり、醸成したりといった機会が不十分な面がありました。本校では3年間を通して探究活動に取り組むため、早い段階から学年や分野の枠を超えて、知識やスキルを共有し、キャリアコアを発見し、自分や社会をプロデュースするスキルを身につけて欲しいと考えています」と、進路指導部主幹の藤原亮治教諭は期待を込める。社会に進出すると、縦のつながりの中で行動する機会が圧倒的だ。他者との関わり合いの中でさまざまな知見やスキルを吸収することで、成長につながるため、高校でそうした機会に恵まれるのは心強い。

同校は平成26年度文部科学省「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」に関する研究開発指定を受けて、国内外の大学や企業、国際機関等と連携しながら、質の高い教育課程等の開発・実践に勤しんでいる。

進路指導部 主幹
藤原 亮治 教諭

同校が掲げる研究開発構想は「先進的な総合学科を活かした持続可能なアセアン社会を創るグローバル人材の育成」。多様な集団の中で自国の伝統や文化を大切にし、意見交換に努め、自律的に活躍できる人材育成を目指している。国連の持続可能な開発目標に貢献し、共創的対話力で新しいアイデアを創出する。

全生徒に対して、地球市民醸成プログラムを開発し、アセアン諸国と連携して、2年間に及ぶ課題研究プログラムを開発している。2年生で3週間程度インドネシアでフィールドワーク、3年生では筑波大学におけるアカデミックインターン研修を実施しており、加えて、コミュニケーション能力向上のための英語+1カ国語マスタープログラム（インドネシア語講座）も実施している。

3年生では「卒業研究」を実施。1・2年生で培ってきた学習成果を基に、ゼミ形式で国際的な課題をテーマ設定し、研究所や企業、大学との連携の中で研究活動を行い、課題研究の成果がその先の進学に直結するようなプログラム開発を進めている。16人の教員が一人当たり約10人の生徒を担当し、担当教員に限らず、全教員に横断的な相談が可能。生徒・教員が全員で関わる形で実践されているのが特徴だ。

フィールドワークを通してインドネシアの生徒と課題を解決

「国際フィールドワーク」では、異学年でチームを編成。同校とインドネシアの高校と協同でプログラムに取り組んでいく。新たなパラダイムに対応できる生徒を育成すると共に、バックグラウンドが異なる高校生が国や言語の壁を超えて参加している。いずれは複数の国と地域が参加できる環境を整え、複合的に対応していく方針だ。

「グローバルライフ」では、家庭基礎をベースに、グローバルを身近な課題として捉え、日常生活と結びつけながら学ぶ。グローバル化が進む現代社会において、すべての人がグローバルな課題と向き合っていく必要があるということを意識させる狙いだ。

多様な文化を理解し、尊重する

一方、平成29年2月に「国際バカロレア認定校」に認定され、平成30年度入学生より、高校2・3年生を対象として、「IBディプロマ・プログラム（DP）」を導入している。

IBは、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としている。学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいる。世界各地で学ぶ子どもたちが、人間の考え方は十人十色であり、それぞれを認められる人として、積極的に関わり合い、共感する心を持てる人材となるよう、働きかけているプログラムだ。

IBは求める学習者像として❶探究する人❷心を開く人❸知識のある人❹思いやりのある人❺考える人❻挑戦する人❼コミュニケーションができる人❽バランスの取れた人❾信念を持つ人❿振り返りができる人――という10の人物像を設けている。

これを踏まえ、同校では、「持続可能な社会の創造とその発展に貢献できる人間を育成する」ことを教育目標に掲げ、総合学科の高校として、「理論と実践を融合した知」を重視した教育を実践している。SGHの取り組みと共に、これまでに培ってきた教育実践をグローバルな視点からより強化していく。

「ディスカッションする授業は3年間を通して行いますから、意見交換の場でも違和感なく溶け込む生徒が多いです。生き方、考え方が異なる社会の中で対話を通して、互いの背景と本質を探り、最適解を見い出す。そうした柔軟で逞しく生きるためのスキルが磨かれていく仕組みを整えています」と、藤原教諭。早期から意見交換やプレゼンテーションの機会を設けることで、自然と習慣になる。

1年生ではSGクラスに所属して必修科目を学習する

国際舞台の運営等の経験がグローバルリーダーの力に

1年生で全員が「海外校外学習」に参加。現地では、ホストファミリー宅にホームステイする。現地の高校生との交流や課題学習を通して、地球市民性を養う。

2年生では、同校独自のプログラムとして「T-GAP」を実施。5人程度のチームで「グローバルとは何か、そこにある課題は何か」を議論し、解決のためのアクションプランを作成し、実践する。T-GAPの取り組みは、3年生の卒業研究のベースとしても機能している。

が、2年生からはIB・DP科目を中心に学習。同校では6科目中2科目は英語で学習しており、その他科目についてもほとんどの資料が英語で書かれている。母語運用能力に加え、学術的な英語運用能力を高めることも可能だ。

同校の多様な取り組みは、生徒が幅広い視野を持って、進路選択することにもつながっている。「進路選択に関しても、例えば大学を目的にするのではなく、あくまで大学は〝なりたい自分〟になるためのツールですから、自分らしくいられるところはどこなのかを、対話を通して引き出せるよう、心がけています」。藤原教諭の「自分らしく」を重視した進路指導が、生徒の可能性をさらに引き伸ばしているのだろう。そのほか、生徒の多様な興味・関心に応えるべく、大学や企業等と連携し、模擬授業や出前授業を実施。多様な角度から社会を見ることで、進路選択の一つの材料にもなる。

目まぐるしい時代の変化にも柔軟に対応する筑波大学附属坂戸高校。「個」を尊重し合う人材こそが多様化する現代社会の最前線で活躍するのだろう。

「リーダーシップ研修プログラム」

8月28～30日の三日間、筑波大学附属坂戸高等学校において、株式会社イノベスト（本社東京・渋谷区）と大学新聞社共催の「リーダーシップ研修プログラム」が実施された。本プログラムは思考力について多くのグループワークを通して学ぶ中で、リーダーシップを発揮せざるを得ない環境を作り、研修中の問いかけや、プログラム最後の振り返りを通して、自己のリーダーシップを伸ばしていく設計。思考力については段階に分けた段階的なワークを通して学んだ。

三日目には学年の枠を超えたグループワークに夢中になっていた

一日目は「課題発見」をテーマに実施。「漢字当てクイズ」や身近な悩みを課題として取り上げたワークに取り組んだ。

一日目のラストは、グループで国の問題や若者が抱える課題をテーマにディスカッション。各メンバーの議題に対して質問し合うことで深掘りし、考察した。最後に一日目として学んだことを、日常でどのように活かしていけるかをグループで話し合い、この日のプログラムは終了した。

二日目のテーマは「課題解決」。前日のワークで出た社会的課題について、「本当にやりたいことは何か」という本質を考え、解決策をグループごとに細分化し、分かりやすく整理した。

同じ議題を扱うグループでも異なる視点で解決策を講じていた

例えば、スマホ依存や地方の過疎化問題など、各グループで出し合ったテーマを解決策別にグループ分けし、ラストは決めたテーマと出し合った解決策を発表。問題の構造を考えることで、見落としがちな問題に気づくことができるということを学んだ。そして、考えを的確に引き出し、物事を明確にすることで、真の目的の発見につながるということを意識し、最終日へと臨んだ。

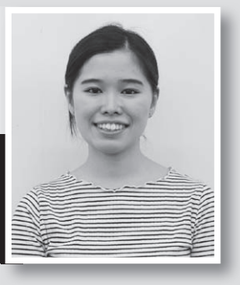
最終日には、三日間の総括として、「アイデアの改善」をテーマに実施。リーダーシップについて改めて振り返り、前日に出した解決策について、誰が見ても分かりやすくなっているかなどを見返し、アイデアを改善して整理した。また、アイデアの掛け算に挑戦しながら三日間を通して養った思考力を総動員して、枠にとどまらない斬新なアイデアを各グループでポスターにまとめ発表。生徒たちは伝わりやすいポスターのレイアウトやプレゼンテーションを工夫しながら、堂々と発表していた。

プログラムのラストは、自分がリーダーシップをどのように発揮し、グループの目標達成にどのような良い影響を与えることができていたかを振り返った。振り返りではSBI（Situation, Behabior, Impact）フィードバックの手法を用い、グループメンバーの良いリーダーシップ行動に対して、フィードバックを伝えあった。フィードバックを通して、自分が意識的に取っていた行動が客観的に見ても良い影響を及ぼしていたと知る機会になるだけでなく、自分は意識していなかった行動がグループに良い影響を与えていたことに気づく生徒もいた。意識的にリーダーシップを発揮し振り返り、改善するプロセスを通して、自己のリーダーシップを伸ばしていけることが講師より伝えられ、三日間にわたるリーダーシップ研修プログラムを締めくくった。

今回のプログラムを受けて藤原教諭は「それぞれが持つリーダーシップを生徒自身が自覚し、自己肯定感を持ってもらいたいという願いがあり、今回のプログラムを実施しました。日頃の授業で培ってきたスキルを改めて認識するという意味でも、実施の意義があったと感じています」と、同プログラムの手応えを感じていた。

誰もが持つ〝リーダーシップ〟を引き出す

株式会社イノベスト ◀菱山 諒氏 × 曽我部 梨羅氏▶



株式会社イノベストは、教育機関の持つ資源の効率的かつ効果的な活用の方法を実行支援することを目的に掲げ、全国の大学をはじめとする教育機関から依頼を受けている。

2020年の学習指導要項改訂に当たり、「主体的・対話的で深い学び」に対する注目度は非常に高い。時代のニーズに応えるように、同社では授業をアクティブにする方法として、①教育目標を明確にすること②学生・生徒の支援を取り付けること③学生・生徒のアシスタントを活用すること④教育インフラの整備と強化をすること――を掲げ、各教育機関が抱える課題に対して具体例を基に、ソリューションを提供している。

今回実施された「リーダーシップ研修プログラム」は、大学生を対象として実績を積んだ内容をもとに、高校生対象の内容へと整え実施された。世界標準のリーダーシップ最小三行動として「目標設定と共有」「率先垂範」「同僚支援」の三つを掲げ、権限がなくても誰もが発揮できるリーダーシップを生徒たちが理解・発揮できるワークショップ形式で実施された。自分が所属するチームや組織が達成すべき成果・目標をグループ内で共有し、目標の達成に向けて、模範となる行動をそれぞれが取る。そして、他人を巻き込み支援しながら、行動することで、それぞれがリーダーシップを発揮する。

ファシリテーターを務めた曽我部梨羅氏は「初日に取り上げた〝質問〟は、三日間を通して、いろいろな場面で効果を発揮したはずです。他者から意見を引き出すという意味でも有効な手段ですから、意識しながら取り組んで欲しい。また、〝構造〟で考えるということも、問題の本質を見極めるのに重要。さらにその先の仕組みを考えることで、最善の解決策にたどり着けるはずです」と、参加者にメッセージを送った。まだまだ高校現場でも、権限を持つ者のみが発揮すべきと思いがちなリーダーシップ。今回の講座は世界標準では誰もが強みとなるリーダーシップを持っていることに気づく契機となり、秘めた可能性を自然と引き出すような内容になった。

企業を相手に、本物のビジネスを体験し、リーダーシップを育てる

BLP（ビジネス・リーダーシップ・プログラム）とは？

BLPは、グローバル社会で活躍できる人材の養成を目的に作られた、経営学部経営学科のコア・カリキュラムです。チームでのプロジェクト実行やスキル強化を通して、ビジネス・リーダーシップを体験的かつ段階的に身につけていきます。

1年春学期の「リーダーシップ入門」をスタートして、3年生春学期のBL4まで5学期2年半にわたって行われます。

リーダーシップを学ぶために、プロジェクト実行とスキル強化を実施することが特色です。

なぜリーダーシップなのか？

必ずしもリーダーシップ＝カリスマ性ではありません。社会のあらゆる場面において、とりわけビジネスの現場で必要とされているのは、他人に気を配り、小さなチームをまとめて、全体で成果を上げるスキルを持った人材です。実はこうしたスキルこそが重要なリーダーシップなのです。BLPでは、社会が求めるこうした「権限がなくても発揮できるリーダーシップ」「ビジョンを示し周囲を巻き込むリーダーシップ」、すなわち「ビジネス・リーダーシップ」の養成を目指します。

＜経営学部＞〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1 TEL 03-3985-2660 URL http://www.rikkyo.ac.jp/